

# とぐろ日記

<11月5日>

朝おきて窓をあけると  
すごく恐ろしい光景が広がっていた  
子供の頃から飼っていたニワトリのハナコがいなくなっていて  
そのかわりに  
地面に土と血で汚れた  
ハナコの白い羽や肉塊が散乱していた

急いでまだ寝室にいるママを呼びに行った  
ママがおきると  
妹のモモコも起きてきてしまった  
まずいと思いモモコを止めようと思ったけど  
もうその時は遅かった  
妹は現場を見て大声で泣き出した

庭の中央にある鳥小屋は  
有刺鉄線でぐるぐるに囲ってあって  
頑丈にできている  
おまけに  
私の家の塀は高く、  
外からは侵入できないようになっているのに  
いったい誰がハナコを殺したんだろう

ママは  
「イタチに襲われたんでしょう」  
とあまり興味なさげに言って  
また寝室に戻って行ってしまった

実の娘がこんなに悲しんでいるのに、それはないでしょう？  
私は落胆した

ハナコの血と肉がへばりついた鳥小屋の前で

ぼう然としているモモコを

私は

「大丈夫、大丈夫」

と言ってなぐさめた

<11月9日>

学校から帰ってくると

家がすごくしんとした

よくみたら

机の下に妹がいて

三角座りをして泣いていた

涙をためた目は真っ赤になっていて

身体はがくがく震えていた

どうしたの

聞くと

「ママにフライパンで殴られたの」と、小さな声で言ってた。

「あんた、何かしたの」と聞いたら

「なにも」と首をふった。

机から出てきたモモコの脚には

紫色のあざがたくさんついていた

私は言葉をうしなった

「おねえちゃん……」

人を信じられない目をしている妹を

私は何も言わずに抱きしめた

<11月13日>

私はまだ

ママがモモコを殴ったことが信じられない

あの優しくて、家族思いで、きれいで、完ぺきだと思っていたママが

なぜそんな愚かなことを  
娘にしなければならぬのか  
でも、ニワトリの事件以来  
私はママのことをおかしいと思いはじめてる  
お父さんがいなくなってから  
わたしたちをがんばって育ててくれたママ  
完ぺきなママは今  
崩れようとしているのか

<11月20日>

やはりモモコはママに虐待されている  
私は見た  
ママが妹の部屋に侵入し  
妹の髪をつかんでひきずりまわしているのを  
そのとき  
ママは悪魔のように怖い目をしてた！

妹は「やめて」と何回も言ってたけど  
まったくやめる気配はなかった

あまりにも強くひきずってたから  
モモコの髪の毛がぶちぶちぬけてた  
ひざやひじは  
皮膚が擦り剥けて、血がにじんでいた  
信じられない  
私はママのことを信じていたのに

きっと今夜はショックで眠れないだろう

<11月23日>

わからない、わからないよ  
ママ、どうして妹を殴るの

殴るなら私を殴ればいいのに

妹は私より成績悪いし、愛きょうもあまりない  
でもそれは人に甘えるのが苦手なだけで  
本当はとっても素直で優しくていい子なんだよ  
それは育てたあなたがよく知ってるはずでしょう  
1年前は仲良くやってたのに  
どうして今こうなっちゃったの

私はどうすればいいの  
警察に行くべきなの  
でも  
警察が中途半端に動いて  
妹を保護しなかったら  
妹はママの怒りで殺されるかもしれない  
そして、私も……

こわいこわい誰にも相談できない  
誰か助けてください

<11月29日>

妹がどんどん痩せていってる  
夕食を食べる量があきらかに減ってきている  
しかもトイレで吐いているのも見た  
きっと日ごろの虐待のストレスで  
ご飯を身体がうけつけないんだ

今日の夕食はシチューだったけど  
妹はぼーっとして  
まったく手をつけなかった

シチューを暗い目で見つめてるだけ

モモコは

「いち、に、さん、し」とシチューに浮いている肉を  
あざだらけの変色した顔を  
前にクイ、クイ、と突き出しながら  
数えてた

まるでニワトリみたい

「はやくたべなよ、冷めちゃうよ」  
と私が優しく言っても  
肉を数える瞳の動きはとまらない  
「にじゅきゅ、さんじゅ、ごじゅう」  
お姉ちゃんの声が聞こえていないのか、いくらいってもきかない

ママは「食欲がないのね」と言ってほほえみながら  
なんの躊躇もせずモモコからシチューの皿を奪いとった  
そして、その瞬間からまた虐待がはじまった

ママは  
妹の頭にあつあつのシチューを  
ざーーーーーっと  
かけたのだ

<12月4日>

妹は死んだハナコのことを忘れられないのか  
ニワトリのように首を前に突き出して  
ものを数える癖がついてしまった

今日はママが  
私に金色のバラのブローチをくれた  
でも妹には  
あげてなかった  
ふつうに妹をスルーしてた

妹は悲しそうな目をしてた

それでもいっしょうけんめい、笑ってた  
唇からのぞく前歯がほとんど折れて  
バキバキになってることに気が付いた  
シチューのやけどもまだ治りきっていないし

そのあと私は  
ママのいないところで  
ブローチを田んぼに捨てた

<12月6日>

今日は近所の交番に行ってみた  
そろそろ本気で  
おまわりさんに相談したほうがいいんじゃないかと思ってた  
私は、そっと交番の中をのぞいた  
中には誰もいなかった  
「こんにちは！」と  
大きな声であいさつしてみたけど  
何も返事はなかった

机の上を見ると  
なにかがあった  
それは本だった

私はおもわず中身を見てしまった  
恐ろしい本だった  
がりがりに痩せた裸の女の子が殴られながら男の人に犯されていた

私は、なんだか涙が出てきた  
見てはいけないものを見てしまった  
かなしくてかなしくて  
胸が張り裂けそうになった  
急いで交番を出た

<12月7日>

モモコのことは私が守るしかない  
大人は信用できない

<12月8日>

ママがモモコをなぐるのを  
どうしたら止められるのか  
そして  
なぜ彼女はモモコだけをなぐり続けるのか  
世界最大の謎だ

<12月17日>

モモコ、何があってもおねえちゃんがあんたのこと守ってあげるから  
だから泣かないで  
泣いちゃだめ  
泣いたら負け  
強く生きなきゃ

<12月24日>

今日はクリスマス・イブ  
あたしはツリーの飾りをしたのに対して  
モモコは七面鳥を殺して羽をむしりにとって逆さまにして血を抜いて  
さらに腹を掻っ捌いて内臓を取り出すという史上最悪な役割分担をさせられていた  
あの女が仕組んだことだった  
モモコは何もいわなかった  
あざだらけの紫色の手で、七面鳥のあしをもってぐるぐるふりまわしてた

<12月25日>

クリスマスなのに雪ではなくてひょうが降ってた  
玄関のクマの置物にひょうが当たって  
クマの鼻が欠けた

今日はそれ以上に衝撃的な出来事があった

クリスマスパーティのとき

あの女がモモコに謝罪したのだ

ママはワインを飲んでかなり酔っぱらってた

「ママはね、本当はモモコのことなぐりたくないんだよ！愛してるんだよ！でもね、でもねとめられないの！この胸の奥からこみ上げてくるモモコを殴りたいっていう衝動をとめられないのよ！でも信じてママはモモコのこと愛してるんだよ！それだけは覚えておいて！」

モモコは何も言わずにうつむいてケーキを食べてた

クリームをつけたフォークはがくがくと震えていた

モモコが感情を必死で抑制しているのは確かだ

私は、怒りで頭が爆発しそうだった！

嘘！うそうそうそうそうそうそうそ

そんなのうそ！うそばかり！嘘だらけ！

ママの嘘つき！くそやろう！

<12月26日>

あたしは世界を憎む

この嘘に満ち溢れた矛盾ばかりの世の中を憎む

鳥もビルも人も木も

この青い美しい空さえも

私は、優しくて無垢で純粋なモモコを

不幸にさせたすべてのものを憎む

憎んでも憎んでも憎みきれない

私の深い怨念は

渦のようにぐるぐるになって

とぐろをまく蛇のようになって

いくら憎んでもまだあまるこの世の

この世界に対する憎しみを

ここに言葉に代えてぶちまけてやる



<2月8日>

私とモモコは森に遊びにいった

二人でこの世のきれいごとおよびにこの世の汚さについて話し合った

モモコはこんな世界に生きていてもしかたがないから自殺しようと考えてたみたい

私は姉として

まだ未熟な妹の誤った考えを正さなければならないと思った

モモコは死ななくていいんだと言い聞かせた

私たちは知識人となり

力を合わせてこの醜い世界を終わらよう

この世界の終末を鑑賞し、あざわらってやろうと約束した

<2月14日>

森に行った日から

モモコはひましに

明るさを取り戻していった

おなかですいたら森にあるキイチゴを食べた

それでおなかは足りるので

家でママが作ったごはんは食べないようにした

ママは悲しそうな顔をしていたけど

それを見ると楽しくなって二人で笑った。

<2月15日>

今日はばばあが作ったお弁当を二人でドブに捨ててやったよ。

私もモモコも

私立学校だから

給食じゃなくて、ばばあの作った弁当を持っていかなければならない

まじでうざすぎる

モモコは日ごろの鬱憤を、弁当を捨てること、ばばあの作った食事を拒否することで解消してた

「死ね！ばばあ」と言いながら

しいたけの煮物や鳥のからあげを、緑色のドブの中にぼちゃぼちゃ落としていた

<2月14日>

今日も森で遊んだ

モモコが森の中を走りまわるリスをつかまえて

しっぽをもって振りまわして

木にたたきつけて一発で殺した。

「いけにえにするんだよ」

にやにやしながら言ってた

土の上に星のマークを書いて

世界を破滅させる呪文を二人で唱えた

真ん中にはいけにえをおいた

いけにえの目はくりぬかなければならない

モモコが、スプーンを使うとうまくとれるよ、とおしえてくれた

二人で裸になって

マークのまわりをまわった

キイチゴをつぶして唇をまっかにぬりたくった

冬なのに、さむくなかった

むしろあつかった

熱くて、熱くて

かなしみが

燃えてこげていくようなかんじがした

<2月20日>

ある日

庭に咲いているツバキがころりと落ちたのをみて

思い立った

そうだ、ママを殺そう

モモコと二人でママを殺してしまえばいいんだ

そうすれば醜い世界は終わるんだ

どうしてもっとはやく思いつかなかったのだろう  
素晴らしいアイデアを妹に伝えたと  
彼女は目を輝かせて、ひゃっほう！といていた

<2月25日>

ママを殺す方法を三つくらい思いついて  
そのひとつの「毒殺」を  
近所の悪ガキのデボラで試してみた  
洗剤と草枯らしをまぜて  
「コーラ」だと言って飲ませたら  
デブのデボラはバカだから、すぐのってきて  
一口で飲んじまったよ  
そしたら吐いたよ  
げええええええって、ものすごい勢いだった  
そのときの顔がかなり笑えたよ  
ブルドッグみたいにくっしゃくしゃの顔しててさ  
血管とかいっぱい浮いてた  
モモコはキャーキャー喜んじゃって  
「死ね死ね」って叫んでたけど  
結局「毒」じゃ、死ななかったよ、デボラは。  
血がでるまで吐いたあと  
「おかあさん」と叫びながら  
崖へむかって走って行って  
おっこちで勝手にひとりで死んだ  
やっぱりデボラはばかだったねー  
と  
二人で笑いあった

<3月3日>

私たちは全く狂っている。

<3月5日>

あの女は

あたしたちが弁当をどぶに捨ててることに気づきやがった

食べたけいせきがないから

気づいたらしい

またモモコが殴られる！と

わたしはとっさに思った

でも

モモコは殴られなかった

あの女は

いきを殺して

静かに

涙をぼたぼた落として

空のお弁当箱をみて泣いてた

<3月7日>

いよいよ明日だ。

世界中の人々の喜びと歓喜が聞こえてくる。

いよいよ明日、あの女がいなくなる

私はうれしくて、モモコと森で裸になってダンスした

地面に呪いのマークをかいて、いけにえを飾って、木いちごで、真っ赤に顔を塗りたくって、いつまでもダンスした

<3月8日>

朝から胸がうずうずしている

自分の心臓の音が

サンバを踊っているようにとっても早い

モモコが「お姉ちゃん！殺そう！はやく殺そう！ねえ！はやく！はやく！」  
と私をせきたてる声が、家の外から聞こえた

私もそれに応えるように  
きゃーーーーーっ と奇声みたいなものをだして  
激しすぎるスキップをして  
庭へ飛び出した

すると、モモコがポプラの木の陰に隠れていて  
「こっちこっち」と手招きをしていた  
モモコのそばへ行って、モモコが指さしてる方向をみたら  
ママがいた  
ママは、花壇の手入れをしてた  
春に花が咲くように、種をまいてた  
「咲いたら、あの女の墓に供えてやるか」  
と二人でウシシッと笑った  
そのあと  
モモコは忍び足でママの背後へまわって  
野犬を追い払う用の鉄パイプで、ママの後頭部をコーンと殴った。  
ママは「にゃっ」と野良猫みたいなマヌケな声を出して  
花壇の土の中に、ずぼっ！と一直線にささったよ  
それでもまだびくびく動いていたので  
そこをすかさず あたしが  
レンガでぶんなぐってやったよ

<日付不明>  
くそ、あの女くそ  
嫌い嫌い  
あんなやつ  
もういやだ

<日付不明>

ママの死体をどうやって処理しようか

二人で考えた

そのまま森へ捨てると

においとかで近所の住民に

見つかると思った

するとモモコが

食べればいいんじゃない？

っていった

私は賛成した

<日付不明>

風呂場でママをノコギリでばらばらにした

腎臓とか、大腸とかいろいろ出てきた

血がすごくたくさんでた

意外にも湯船から血があふれてしまって、服とか顔にママの血がべっとりついて、困った

血というよりも

なんだか煮こごりみたいなもので、生理みたいなにおいがして

吐きそうになった。

モモコは食べられそうなところだけ、ざくざく切り取って、台所へもってって、

血抜きをした。

「平気なの？気持ち悪くないの？」

とあたしが聞いたら

「七面鳥とおんなじでしょ。こんなものは」

と

ケタケタ笑いながら言っていた

ママの

おっぱいを

オーブンで焼いた。

オーブンの中をみると、ものすごい量の黄色い油が滴り落ちていた。

二人で白い皿に盛って食べた  
皿は、肉がのった瞬間に、その油であふれた  
血を抜いたはずなのに  
すごく生臭かった  
なんか  
ぶよぶよしたあぶらのかたまりだった  
ママのおっぱいは口の中でとろけた

ママのクリトリスも食べてみたけど  
予想外に頑丈で  
ゴムみたいにのびて  
噛んでも噛んでも  
噛みきれなくて……  
ずっと私の口の中に残ってて……

ぼたりと  
何かが皿の上におっこちてきた  
あたしの涙だった  
だんだん心臓がはやくなってきた  
苦しかった

モモコがニヤニヤしながらこちらをみていた。  
「おねえちゃん、なんで今更泣いてんのさ。泣くほどうまかったか？それとも、かなしいのー？もう殺しちゃって、しかもこんなバラバラなんだぜー！？いまさらもとに戻りたいなんて、不可能だっつーの！！アホじゃないのー！」

この女のこと愛してたのか？  
モモコが魔女みたいなしゃがれた声で言ってた。  
モモコが笑うと、歯と歯のすきまからママのぎとぎとした肉汁がじゅわっと出てた

<日付不明>  
あたしはモモコがいなくなってから  
毎日いろいろ考えた  
何か大切なことをわすれてる気がする

あと少しでわかりそうなのに  
いくら考えてもわからなくて  
いたずらに月日だけが過ぎてって

なんだかお腹がいたかった  
頭もいたかった  
すべてが重かった  
たえられなかった  
こんなときこそ教会に行こうかなとおもった

ねころがってたら、空がすごく青いことに気がついた  
ただそれだけだったけど  
私にとってはそれで十分だった

そういえば  
こないだオープンンの裏から  
ママのものらしき日記帳がでてきた  
明日、これも一緒に教会にもっていこう



<3月7日>

愛しい娘が、こんなふうになってしまったのは本当に悲しいことです  
娘が多重人格障害を患っているとお医者様に告げられたとき  
私の頭の中は真っ白になりました

絶対に完治させなければと思い  
お医者様からもらった抗鬱剤を飲ませようとしたのですが  
娘はそれを激しく拒絶しました

無理やり飲ませても  
隙を見つけるとすぐにトイレで抗鬱剤を吐いてしまいます  
そのうち抗鬱剤だけではなく、食事も受け付けなくなり  
やせ細っていきました  
そんな娘をみて  
私は胸がはりさけそうでした

お医者様いわく、実の父親に虐待され、レイプさせられた娘は  
過去を消すために  
もう一人の「モモコ」という女の子を作り上げたそうです  
そして、夫ではなく、  
なぜか  
私が「モモコ」を虐待している設定になっているということも  
教えてくれました

私はなにがなんだか  
わけがわからなくて、毎日泣きました  
一緒に食事をしていると急に奇声をあげて  
自分自身を殴り始めたり、シチューをかけたりする娘を  
理解できませんでした

お医者様は「ひとつひとつの人格を受け入れてあげることが大切だ」と言っていたので  
私は何があっても我慢しました  
娘が私の作ったお弁当を捨てていることも  
夜中にニワトリを殺していたことも

我慢しました

誕生日のプレゼントにブローチをあげたのに捨てられてしまったことも

我慢しました

そもそも

娘は自分の誕生日を忘れてしまっていたのです

もう完全にモモコにのっとられてしまったのでしょうか

そんなの信じたくありません

私が夫と娘を二人きりにして出張に行ったがために

こんなことになってしまいました

私はつらいです

毎日が苦しくて苦しくてたまりません

でも娘はそれ以上に

きっとつらい思いをしているのです

でも娘を愛しているから

本当に愛しているから

誰よりも愛しているから

私は

まだまだ

頑張ってみようと思います

娘の笑顔がみたいです

明日は娘の大好きな

チューリップの種を庭に植えることにします

春には

きれいな花が咲くころには

きっと娘が元気になって

「お母さん」と微笑んでくれることを願って

End.